

魂の行へ (民謡)

太田 赤童

山の夜の静けさ
牙え切つた數知れぬ星
巨獸の眠てるやうなだんまりの嶺
永久の存在は、
自然？
人生？
神祕主義者は自然に驚異を求めた、
自然主義者は人生に裸體を求めた、
醜い主義者は次から次へと
いろいろの騷擾を醸しつゝ……。
大生命の壺をさゝげて
跣跟めきつ何處へ何を求めて、
あなあわれ……
魂の香泌む壺とも知らで
青き月の光りに
森の奥深く影は次第に消えゆく。

(一一、九、二六)

調落の初冬

小松 觀學

樹々は日々に衣を剥がれて慄えて居る
風は面白そうに落葉を轉かして驅けて行く
薪を負ふた女は白い息を吐きながら通る
後からからくんと落葉が走つて行く
荒涼たる山路!……。
向ふの山々は疲れ果てた太陽の弱い日脚を受けて茜
に
染まりながら暮れを惜しんで居る
そして初冬に這ひ寄つて來たのである
と遠くで夕鐘を撞いて居る。

遠くなります (七面山)

結 城 光

遠く鳴ります
あらしぎ山に
鐘は寒空
遠黄。